

報告

盛岡秋祭り「め組」における参加者の相互作用関係

Fieldnotes on Interactions among *Me-gumi* Participants at the Morioka Autumnal Festival

三須田 善暢*

MISUDA Yosinobu

Keywords: *Morioka autumnal festival, fire brigade, Nataya-tyô*

盛岡秋祭り, 消防団, 鉦屋町

1. はじめに

本稿の目的は、盛岡秋祭り（盛岡八幡宮例大祭）における盛岡市鉦屋町の山車奉納事業に参加するなかから、人々の相互作用関係を参与観察し、その特徴のいくつかを明らかにすることである。

岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科では、2年次に「地域文化理解演習Ⅰ・Ⅱ」という授業科目を設けている。2015年度は、まちづくりで特色のある鉦屋町の活動に参加し、地元消防団と秋祭りとの関わりを記述的に分析することになった。本稿はその記録の一つである¹。

参与観察の焦点には、大きくは以下のようなものを考えた。(1) 山車制作における相互作用関係：たとえば、山車の作成にあたってどういう人々・要因が関わっているのか。他の消防団分団とはどのように関わっているのか。その際の課題等は何か。(2) 音頭上げの練習における相互作用関係：たとえば、練習に参加している人の属性、参加理由は何か。参加者は足りているのか。そこでの課題等は何か。

(3) 山車運行における具体的な過程と相互作用関係。ここでは運行の詳細な記述を心掛ける。——これらの基礎データを参与観察を通じて把握・記述することにより、地元の人々にとっての秋祭りの意味を考えてみたい。

なお、祭礼行事をめぐる先行研究は膨大であるが本稿ではそれらには立ち入ることはできない。本稿では、盛岡秋祭りという個別事例の記述的分析に焦点をあてたい。盛岡秋祭りに関する先行研究では、小形(1986)が歴史や山車制作、運行等について詳細に記述している。また、山屋(2015)および山屋の作成ホームページ(山屋 2016)が過去の山車の種類や特徴等を詳細に記載している。ただし、それらには祭りに関わる人々の相互作用関係は詳述・分析されていない。相互作用関係に着目した研究としては、岡(2001)が、子どもたちが祭り(小太鼓)に参入・習熟していく過程の参与観察調査をおこない、「組」参加の子どもと「観光協会」参加の子どもとの関わり方の違い等を示している。ここでの参与観察データは貴重であるが、子ども以外の一般参加者の具体的な相互作用関係は記述されて

いない。本稿ではそれを描くことにしたい。

2. 地域の概況と関連団体など

本稿で対象とするのは、盛岡市鉦屋町を範囲とする盛岡市消防団第二分団(め組)による盛岡秋祭りへの山車奉納作業である。ここで必要な限りにおいて、祭礼・対象地・関連団体の概況を述べておく。

盛岡秋祭りは、毎年9月14日から16日まで開催される。ただし、山車運行は前日の13日から開始されている。14日が八幡下りの山車パレードであり、15日は岩手公園からの盛岡山車大絵巻パレード(大通りパレード)をおこなう。

祭りには、市内の数箇所から山車が奉納される。奉納主体の多くは消防団分団である(一部、地縁関係ではない有志団体も山車を奉納している)。だが、祭りの際には、分団は「組」という名称で関わることになる。第二分団は「め組」、分団長は「頭取」と称する(しかし、団員は分団長を「親方」と呼んでいる)。毎年奉納する組もあるが、多くは数年ごとの奉納であり、奉納の際には祭りのために組独自の会計を立てることになる。費用は、め組では1000万円近くかかる。山車の制作にはそれほどの費用はかからないが、付随する飲食費の費用がかさむためである²。2015年は9団体が山車を奉納し、め組は5年ぶりであった。

第二分団は大慈寺地区コミュニティ消防センターを番屋とし、鉦屋町のほか、大慈寺町、神子田町などの消防を担当している。分団長の岡田勉氏は2期目、70歳で、その下に副分団長と部長がいる。3人とも鉦屋町居住者である。その他の分団員は22名で、女性や30歳代の若者もいる。分団の活動は非常に多忙で、消防演習、巡回、会議等が週末に入っている。消防以外の祭りの準備も含めると、その多忙さが推測できる。

め組の山車奉納には、一般の地元住民のほか、次の組織の構成員も参加する。「第二分団後援会」は、第二分団のOB会である。「め組二八会」は、当初はめ組のOB会であったが、現在ではめ組の同好会的団体である。「南部火消

* 国際文化学科

伝統保存会」は、盛岡市消防団員の有志で構成されており、山車運行や纏振り、梯子乗り、裸参りの保存・伝承活動をおこなっている。「め組山車保存会」は、2014年に発足したもので、山車と祭りの文化を保存するために作られた団体である。この団体が主体となり、第二分団の旧番屋を改修して山車保管展示室とし、通年で山車を展示することになった。これらの組織にくわえて、地元の大慈寺小学校の生徒有志も参加し、主に小太鼓や笛を担当する。これら組織の構成員は、当然であるが重複している。以上の他、消防団の友好分団も参加する。第二分団の友好分団は第五分団と第七分団であり、寄付金（御祝儀・花代）の徴収等を手伝う。友好分団以外の分団員も協力することがある。

め組における山車運行への参加費は、参加の内容によって異なる。単なる山車運行、大太鼓、音頭上げ³、笛、保護者のつきそい参加は、4日間で7000円で、その他の強力、小太鼓等は参加費無料である。参加者には半纏が貸し出され頭巾が配布されるが、それ以外の衣装は各自でそろえる。今回め組では300ほどの半纏を用意した。

め組の事務所開きは2015年6月28日であった。この日は番屋2階で懇親会を開き、関係者、地元住民のほか市長・県議・市議らが参加した。

3. 参与観察の記録から

3.1 山車制作における相互作用関係

(1) 山車制作の具体的な作業

私が山車制作に関与したのは7月4日(土)からである。作業は朝9時ごろから開始する。すでに大八車はすでに設置されており、山車の題材(今回も前回同様、前方風流が義経八艘飛、後方見返しが静御前)に使用する岩場も設置されている。主として作業にあたるのは分団長の岡田さんと、岡田さんから頼まれたMさん、分団員のAさんら3-4名である。め組の半纏をまとっての作業である。この頃は土日のみの作業で、参加者は2-3人ほどである。本格的な作業はお盆明けからになる。

以前の奉納時は、お盆明けになってから山車の内容を決めるという、ゆったりとしたものであった。それは、中心的な作業者に大工がいたため、作業のペースがはやかったからである。しかし、特定の人のみが中心的な作業を担ったため、制作の技術がうまく伝承されないという問題点を持っていた。そのため、今回の山車制作では親方の岡田さんが采配をし、多くの人に関与させるようになった。とはいえ、現在でも山車制作にマニュアルはない。親方は全工程を熟知しており、各自は実際に従事していくなかで作業を覚えていくという形である。

作業の一つは、題材の主たる部分の制作である。前回の奉納時に使用した部品は物置に保管されており、使用できるものは補修をおこない再度使用する。この作業は、重労働ではないが、複数名いないとはかどらない作業である。

作業が開始されて間がないためか、不足する工具や部品(釘や角材、胡粉等)があり、そのたびごとにAさんが近所の商店やホームセンターへ買いにはしる。

これらの作業は旧番屋でおこなわれる。ここは昔番屋だったところで、鉾屋町を通る旧奥州街道に面しているため、時折知り合いの人が通りかかり、挨拶とおしゃべりをしていく。過去の祭りや他の分団の情報も、こうした会話のなかでかわされていく。

もう一つの作業は、題材に付随する装飾品などの小部品の制作である。山車に取りつける牡丹や藤、桜の花があるが、これらを造花にするとかなりの額になる(桜は1個90円程度)。そのため、め組では桜は手作りをする。これらの花は会期中に壊れたものを交換するため、桜だけでも7000個くらいは事前にとっておかねばならない。葉も作成し、そこには防水のロウ引きもする。これらのうち出来のいいのは残しておいて次回も使用する。なお、松の枝については、神様への捧げものという特別な位置のため、現在は造花ではなく実物をかざっているが、造花にしようという意見もある。海の波を表す波板も、自分たちで書いて作る。人形の鎧もFRP(繊維強化プラスチック)で作っている。鎧の紐を作り直さないといけないが、修復の技術のある人が高齢化しているのが問題である。

これらの小部品関連の作業はおもに番屋の2階でおこなわれる。この作業には、多くの分団員や鉾屋町に関係のある人がボランティアで手伝ったり、音頭上げ参加者が練習後に手伝ったりする。

なお、人形本体は木製で、過去に使ったものの再利用である。今回、人形の首を一つ修復する必要があり、清水町にある藤村仏具店に依頼して漆塗りをしてもらった。その費用には16万円ほどかかっている。人形の顔の制作・修復は、以前は市内10軒ほどの店で可能であったが、現在はこの店でしかできなくなっている。

(2) 作業の中心人物Mさん

ここで、山車制作の中心を担うMさんについて述べておきたい。Mさんは1950年生まれ、仙北町の第一分団「は組」で2012年まで分団長を務め、は組での山車制作にも従事してきた男性である。前回の奉納まではめ組管内の人物が山車制作の指導をしていたが、今回はMさんが担当することになった。その理由は、親方である岡田さんとの個人的なつながりで依頼されたからである。Mさんいわく「岡田さんだからきた」とはいえ、義務感というよりも、祭りが好きだから引き受けているという気持ちが強い。「山車が好きでない」と制作は「できない。また、手先が器用でないと無理」であり、そのために仕事もある程度犠牲にしないと制作に従事することは難しいと、Mさんは述べる。Mさんは運転手の仕事をしてきたが、は組で親方になったとき、町内の住民から「[親方なのに作業に]何

ででてこないんだ」といわれたため運転手の仕事を辞めている。

3.2 音頭上げの練習における相互作用関係

音頭上げの練習は、18時30分から20時ごろまでで、消防番屋2階で練習をする。私と学生は7月9日にはじめて練習に参加した。その時点では練習は月1回であったが、お盆過ぎ8月24日以降、はほぼ毎晩になる。9月に入ると、実際にそとに出て制作中の山車の前で音頭上げの練習をおこなう。

参加者は10数名の男女で、だいたい60歳代から70歳代であり、80歳代以上と思われる男性も一人いる。男女比は半々で、小学生と就学未満の子もつれて参加する母親も2組いる。その一人の小学校6年の男子生徒に聞くと、彼は去年南大通りの山車の音頭上げに参加し、今年も出たいと思ったため、親から言われたのではなく自発的にめ組の音頭上げに参加したとのことである。

練習では、音頭長のKさん(70歳代か?)が拍子木を持ち、参加者の前で掛け声をすると同時に参加者がそれにつれて唄をうたう(写真1)。音頭長はいい声であり、よくひびいている。歌詞と調子は模造紙に書かれて部屋に貼り出されている。調子は音符にはなっていないが、山と谷の線で視覚化されている。唄は8種類である。すべてうたい終わるのに約20分かかる。1セットおこなったら5分ほど休憩し、5セットほどの練習をおこなう。今回の歌詞は以下の通りである。

(風流 義経八艘飛び)

清和源氏の 薫りも高く 跳ぶや逆巻く 波の上
瀬戸の波風 身も軽やかに 敵をかわせし 船の上
九郎義経 八艘飛びの その名もいまに 壇ノ浦
人の為なら 水火も辞せず 飛び込むめ組の 勇み肌

(見返し 静御前)

歌に秘めたる 静の想い 義経慕い 舞い踊る
今も伝わる 吉野の山に 京の舞姫 名を残す
義経慕い 吉野の山で 舞うや静の 艶姿



写真1 音頭上げの練習風景 (2015年9月2日)

昔を今に 願いを込めて 粋な振袖 舞う静

第二分団の音頭は「二上がり」と呼ばれ、歌詞後半部を高くうたい出すのが特徴である。分団ごとでうたい方がかなり異なるのである。なぜめ組が二上がりなのかについて、Sさんは「どこかの芸者から伝わったものらしい」と述べている。

練習が進んでしばらく日がたつと、音頭長から各自が個別指導を受ける。私がそこで注意されたことは、さびを効かせないと平板になることと、母音をはっきりとさせることであった。

祭り本番の数日前には、白地の扇子の片面にいくつかの歌詞が書かれた物が配布される。音頭上げ時にはこれをかざして、「カンニングパー」にしてもよい。

3.3 山車運行における具体的な過程と相互作用関係

(1)山車運行1日目

山車運行は、秋祭りの前日13日(日)からはじまる。この日は9時30分に番屋に集合し、出発前に山車の前でお神酒をいただき、塩を一掴みなめる。参加者はめ組の半纏をまとい、紫色の頭巾を被る。親方の半纏は「め組 親方」と書かれた特別のものである。その後、番屋に隣接するスーパーの駐車場にて2度音頭上げをおこない、神子田・門方面へ出発する。山車は25mほどの縄で収納庫から曳かれ、山車のてっぺんには電線や木をよける役割の人物(通称電線マン)が2名乗っており、山車の上には小太鼓の小学生が5名ほど乗っている。山車の前には強力4名がいて山車をおしている。親方等の中心人物7-8名が山車を先導し、その後に笛の集団が5-6名、その後ろに音頭上げをする人やその他の人たちがあつく。その中間には「運行委員」の腕章をまいた人物が拍子木を持って山車の誘導をする。笛はタイミングがぴったりあっている。鉦をつく人も1名いる。手古舞もいる。



写真2 音頭上げをする際のチョークづけ

この日、小学生の参加者は80名ほどであるが、圧倒的に女子が多く、男子は5名ほどである。全体の参加者のうち3割くらいは小学生以下である。母親も2-3名がつき

そいとして参加している。

御祝儀をもらった家や店の前では音頭上げをする。その場所には道路上にチョークで印がつけられる。普通の丸(○)や二重丸(◎)は1回、花丸は2回から3回音頭上げをする(写真2)。状況によっても異なるが、め組では普通は御祝儀3000円ぐらいから音頭上げをする。御祝儀の返礼にめ組の番付(山車の人形を描いた紙)を渡す(写真3)。



写真3 め組の番付(2015年用)

音頭上げをおこなう人物はそのときごとに音頭長が決める。はじめの数回は、緊張しているためか何人かは音頭を間違えた。私はこの日、4回の音頭上げをおこなった。

途中、一人の男性(60歳代)が、お酒の飲みすぎでふらつき、音頭長から注意され運行の列から連れ出されてしまった(翌日からは復帰)。この人物は、5年前の奉納時にも同じように飲酒上の問題で途中で離脱させられている。期間中私が目にしたトラブルはこの程度である。酒が入っても非常におだやかな祭りだといえよう。浅草の三社祭のような、やくざ関係者らしき人物は見あたらぬ。

この日の運行中、昼前に雨が降り出して、山車にビニールをかけることになった。木枠を出してそれにビニールをかぶせるという大変な作業である。参加者も各自かっぱ等の雨具を着用する。中野公民館で昼食をとる。ビールを飲む者が多い。その後門町内会で小休止をする。この地域は第二分団が消防を担当しているため、町内会同士でも関係

がある。

その後も雨ははげしく、結局コースを変更して番屋へ直行することになった。17時40分ごろ番屋に到着すると、夕食の弁当と飲みものが渡される。番屋2階で反省会をしながら食べる者もいる。役員たちは番屋1階で懇親会を開いていた。

(2)山車運行2日目

2日目14日(月)は秋祭りの初日である。この日は7時50分に番屋に集合し、スーパー駐車場で全体の写真撮影と、出発式をおこなう。親方らの挨拶と礼拝のあと、親方、顧問、分団員、市議、伝統保存会、後援会、友好分団、二八会、一般参加者の順でお神酒をいただきお清めの塩を振る。親方岡田さん、顧問、本家分団の親方の順で音頭を上げ、南大通りを通って八幡宮の方面へ運行を開始する。ところどころで音頭上げをしていくのは昨日同様である。ただし、南大通りの一部のように山車を停車できない場所では、音頭のみを上げる。参加者に話を聞くと、病院の患者さんには祭り参加経験者が多いので、患者さんに喜んでもらうために病院では御祝儀をだすことが多いとのことである。途中、おもだったお店や他の分団事務所などで休憩をし、そこでお茶、日本酒、お菓子等を振るまわれる。休憩のたびに3度ほど音頭を上げる。他の分団事務所でも音頭を上げるときは、唄の上手な者に音頭を上げさせる。

昼前には盛岡八幡宮へ到着する。八幡宮前での音頭上げは山車ではなく宮社の方をむいておこなう。その後拝殿へ10名ほど集まり、半円状にならび、代表3名が中央に進み出て音頭を奉納する。その際、め組の番付を20枚神社へ渡す。

13時からは八幡下りのパレードである。パレード終了後は、本町、大手先、上の橋等を運行し、18時ごろ番屋へ戻る。途中、葬儀屋の前と不幸のあった家の前を通る際には、太鼓の音を止めて通過した。

(3)山車運行3日目

3日目15日(火)は、私は夕方18時から開始する大通りパレードからの参加であった。参加学生はこの日も朝から加わっており、中央通り、菜園、本町等をまわっている。パレードが終わると山車は早々に番屋へもどった。

(4)山車運行4日目

4日目16日(水)は、これまでに比べて参加者が少なかった。昨日の大通りパレードの4割くらいの参加者である。この日は鉾屋町、清水町、八幡町、肴町らを運行する。なお、運行する場所の日どりは毎年固定されている。肴町の商店街アーケード内は店が多いため、数軒置きに音頭上げとなる。学生いわく、「すごく音が響いてお風呂で歌っているように気持ちよかった」(岩手県立大学盛岡短期大

学部国際文化学科編, 2016: 23)。

この日も事情により私は午後は参加できなかったが、学生は最後まで同行した。最後は鉦屋町をまわり、家々に音頭をベテランの方々が上がっている。夜に音頭を上げるときは扇子を提灯の明かりで照らす。番屋に到着すると納め式がおこなわれる。親方等の挨拶、納めの音頭が披露され、め組独特の三本締めがなされる(岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科編, 2016: 24)。

なお、番付はこの日までは音頭長などの役員が厳重に管理している。今日までは御祝儀の返礼となるからである。

(5) 山車運行以外のこと

第二分団部長のIさんからうかがった、山車運行に関わるそのほかでの重要なこと、課題になっていることをいくつかあげておこう。

まず、今回Iさんが担当した関係各方面への許可申請についてである(道路使用の許可申請など)。運行コースは山車推進会でまとめ、各分団から警察へ許可申請するのだが、その内容が厳密になり締め切りも年々はやまっている。

番付の絵の準備もある。番付はカラー印刷で、その絵描きは3名ほどである。め組では茶畑出身の長松(芸名: 國廣)さんの絵を使用している。過去の番付の絵をめ組で保存しているので、今回はそれを利用して印刷した。

この番付は、御祝儀(花代)をくれた人への返礼として、また、参加者に記念として渡すものである。祭りの運営費は、寄付金・協賛金と参加費でまかなっている。第二分団管内企業からの寄付が基本であるが、賛同してくれる企業へは管外でも集金にうかがう。一般住民からは祭り当日に花代をいただく。山車が行くところは本隊が、山車が行けない(行かない)ところへは友好分団員が支隊として集金にうかがっている。寄付集めは飛び込みが原則である。Iさんいわく「これが[できるのが]盛岡の不思議なところ」。他の祭りでは飛び込みは難しいのではないかという認識である。ただし、事前に趣意書をよんで反応してくれた家は一覧にして当日まわっている。管内の家のほぼ全てに声を掛けているが、アパート・マンションには訪問しない。山車が通る少し前に、本隊の徴収担当が家々へうかがい、花代をいただく。番付を持参して「鉦屋町め組です。ご協力をお願いいたします」といって、500円から1000円程度の寄付金をもらう。「よく来てくれました」と言って3000円くらい寄付してくれる人には、その場で音頭上げをおこなう。Iさんは「申し訳ないから感謝の気持ちをもっていけよ」と、音頭上げ担当の人には伝えている。支隊が徴収する場合は、その場の対応に応じて音頭上げをするか否かを判断する。寄付金だけでなく、酒や菓子などを用意して運行をまわっている人も——Iさんによると300軒に1軒くらいは——いる。寄付金の徴収は、無理じいはしない。それぞれの家は、やってくる山車全てに寄付をおこな

うのであるから、それなりの負担になるからである。希望された場合に領収書も出している。ただし、寄付する側がいわないと領収書を出さないことが多いため、組会計の明朗さに不信感をもつ者もいる。

4. 部長Iさんの祭りへの考え

上記Iさんが抱く、祭りに対する意識・想い・考え等をまとめておこう。Iさんは1957年鉦屋町に生まれ、4人兄弟の末っ子である。鉦屋町には父の代に乙部から越してきて、父は鉦屋町の魚屋に勤めていた。Iさんは高校卒業後東京で1年間暮らす、すぐ盛岡にもどり、その後鉦屋町で生活をおくっている。スーパー勤務のかたわら消防団活動に従事している(2016年には勤めを辞めて自宅で食堂を開いている)。

Iさんは、小学校の時に秋祭りで小太鼓として参加し、その後消防団に入って以来秋祭りに携わっている。それゆえ、「祭りがあるのが自然」と感じている。Iさんが成人してから、め組で山車を奉納したのは5、6回である。しかし奉納しない年でも、友好分団の手伝いとして秋祭りには参加してきた。ほぼ毎年の参加であるが、しかしマンネリ感はないと述べる。Iさんたちがめ組として主体的に関わるのは、奉納する年であり、それは5年に1回くらいだからである。いうまでもなく、め組が山車を奉納するときは苦労が多い。たとえば、Iさんらは勤めを休まねばならず、つきあいで酒を飲む回数も多くなる。とはいえ、Iさんは、「これは運命、宿命だ」と考えている。そうしたことが地域の文化を守ることであり、それはいいことなのだと思う。東京で暮らした経験によって地元に対する思いが強まったということではなく、子どもの時分からそう感じているとIさんはいう。Iさんは、さんさ踊りにも参加するが、さんさ踊りは「観光客のような感じ」での参加であると述べる。しかし、この秋祭りは違う。Iさんいわく「自分にとっての祭りといえどこれだ」。副分団長のSさんに対して、三須田が「なぜ祭りに参加するのですか」と質問した際、Sさんは「答えられない。生まれた時からそうだから」と返答したのだが、Iさんはそれを聞いて、「自分もその通りだ。[祭りに参加することは]ほとんど自然なのだ」と返答したのであった。

このように、Iさんは秋祭りの存在を自明視している感が強い。ただし、Iさんは、そういう気持ちが必ずしも多くの人に共有されているわけではないことも自覚していることに注意したい。たとえば、Iさんは次のエピソードを述べている。1970年の国体時、盛岡市全体の建築・道路等が新設されることになった。だが、鉦屋町は道路整備におくられて開発から取り残されてしまう。しばらくして1998年に、鉦屋町に道路拡張の計画が立ち上がった。だがこの時は、いままでとは逆に道路拡張に反対して町並みを保存しようという運動で注目されることになった。その

動きをみて、Iさんは、“これまで自分は鉦屋町の町並みを特別意識せずに「あたりまえ」と思って暮らしてきたが、同じ世代の盛岡人でも自分のようには思っていない(=つまり、町並みを貴重で特別なものと思っている)人が多いのだ、ということにあらためて気がついた”、と述べている。これは町並みの例であるが、秋祭りに対しても、子どもの時分からの「自然」という意識に対する捉え返しが必要だと推測されよう。

5. おわりに

以上に叙述してきたことをまとめてみたい。

まず山車制作については、これまで大工等で技術をもつ人が中心であったため、技術の伝承が問題視されていた。今回、それを克服しようと親方が工夫したのであるが、しかし実際は中心となって制作する人物は偏りがあることから、いまだ技術伝承の点では問題があると思われる。人形制作等の専門的作業を担う店の減少を考えるとなおさらそうであろう。また、山車の制作には、第二分団のメンバーのみならず、親方の人脈で呼んだ人物が重要な役割にあることが分かった。もし、親方が交代した場合は、そうした人脈のネットワークが切れる心配もある。

音頭上げ練習については、第二分団管内の住民に限らず、ひろく有志が参加していた。参加者たちは、特定の組にこだわるというより、年によって車を奉納する組を渡りあっている。ただし、音頭長は管内の人物であり、音頭上げの主導権は組の人物が握っている。

山車運行を見ると、小太鼓・笛の参加で地元の小学生が多いものの、減少傾向にあり、また今年は女子生徒が圧倒的に多かった。くわえて、強力や大太鼓は鉦屋町近辺の若者が中心を担っている。一般参加者は地域外の人もある。地元住民が主導しつつそれ以外の有志の参加によって成り立っているといえる。

この運行では、羽目はずす人物は排除される。途中休憩でお酒が振るまわれてはいるものの、そこには一定の節度が求められている。

第二分団・め組の役員らは、普段の仕事を休んで参加し、数週間の時間を祭りの準備に費やしている。Iさんのいうように、祭りは彼／彼女らにとっては、「自然」に存在するものと認識されていて、祭りの存在を自明視している度合いが強いといえる。もっとも、いくつかの要因や条件、特に地元外の参加者の影響というものが、地元の人にとって祭りの意味をある程度捉えなおさせ、対自化させているだろう。地域住民のアイデンティティをここに見てとることが可能である。だが、その理解の際には、地元民と非地元民との具体的な相互作用関係をおさえていくことが必要だといえる。

付記

本稿の参与観察にあたっては、第二分団の皆様にお世話になった。記して感謝申し上げたい。なお、鉦屋町でのまちづくりに長年取り組んでこられ、「地域文化理解演習 I・II」にもご協力いただいた建築家の渡辺敏男氏(有限会社〈盛岡〉設計同人)が、2016年1月に逝去された。謹んでお悔やみを申上げる。

注

- 1) この授業への参加学生は高橋美芽さんであり、三須田とともに準備の段階から祭りに参加した。両名は、事前の山車制作と音頭上げの練習、当日の山車運行、終了後の笠越しに参加した。岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科編(2016)および高橋(2016)も参照されたい。
- 2) 相当な昔は、地域の有力者が親方となり諸経費を支出し、参加者から参加費を徴収せずに山車を奉納した。そのため、親方になると「カマドをけす」といわれていた。
- 3) 寄付をもらったお店や個人に対して、お礼の意を込め、七・七・七・五の句を「南部木遣」という独特の調子に乗せてうたい上げるもの(小山2016)。

文献・URL

- 岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科編, 2016, 『2015年度「地域文化理解演習」報告書』。
- 岡健, 2001, 「伝承遊びを再生する条件とは何か——盛岡八幡宮祭礼における山車行事への子どもの参加のプロセスの検討を通して——」小川博久編著・スペース新社保育研究室編『「遊び」の探求』生活ジャーナル, 23-78。
- 小形信夫, 1986, 『盛岡八幡宮祭りの山車行事』盛岡市教育委員会。
- 小山優, 2016, 盛岡山車非公式サイト秋風(2016年1月24日取得, <http://www.moriokadashi-akikaze.com>)
- 高橋美芽, 2016, 「盛岡市鉦屋町め組の盛岡秋祭り」『卒業研究集録』第17号, 岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科: 167-172。
- 山屋賢一, 2015, 「南部流風流山車の研究 I」『岩手県立博物館研究報告』第32号, 岩手県立博物館: 31-46。
- 山屋賢一, 2016, すてきなおまつり(2016年1月24日取得, <http://sutekinaomaturi.fc2web.com>)。